

徹底活用!

ICT

〈第2回〉

『デジタル準拠ノート 明解 歴史総合』を活用した 「歴史総合」の授業展開例

京都文教中学校・高等学校

加藤 周平 (かとう・しゅうへい)

—使用教材—

『デジタル準拠ノート
明解 歴史総合』



1 はじめに

2020年のコロナ禍における緊急事態宣言が出された直後、本校ではいち早くオンラインによる授業の配信を行い、授業のICT化が本格的にスタートした。生徒も教員も各自のデバイスを使用し、Zoomを利用して授業を時間割りどおりに配信する形をとった。しかし、当初はデジタル教材などはほとんどなく、通常の授業を撮影して配信することが精いっぱいであった。各教員も工夫を凝らしながら授業内容が生徒によりよく伝わるようPowerPointを独自に作成したり、授業プリントや課題を郵送して取り組ませたりするなど試行錯誤を繰り返しながら対応していた。

本校では、そのころから文科省が打ち出していたGIGAスクール構想を導入するために具体的に動き出した。2022年度より新入生にタブレットを購入させることが決定してから、教科内ではデジタル教材の導入についての検討が始まった。緊急事態宣言中のオンライン授業の反省から、教員間で共通して使用できるPowerPointやデジタル版のサブノートなどがあれば急なオンライン授業にも対応できると考え、デジタル教材導入の方向で検討を進めた。その結果、指導書のWebサポートコンテンツが充実している帝国書院の教科書『明解 歴史総合』と『デジタル準拠ノート 明解 歴史総合』(以下、『デジタル準拠ノート』)を採用するに至った。

教科会で採用検討した際に、『デジタル準拠ノート』採用に至った主な理由は以下のとおりである。

- ・自学自習を定着させるため。
- ・ノートの回収、チェックが不要になり、教員の手間が省けるため。

・観点別評価の導入に対応するために公平な評価の材料および客観的資料とするため。

・コロナ禍における急な自習に対応するため。

当然、「授業で使用する機会がないのでは」や「使い方が分からない」、「タブレットの操作に慣れていない」、「紙に書かせたほうが覚えられる」などの反対意見も多くあったが、ICT教育を進め教育の質を高めるためにデジタル教材導入に踏み切った。

2024年度より、本校では中学1年生から高校3年生の全生徒が1人1台タブレットを所有することとなり、さらなるICT教育の充実に力を注いでいる段階である。

2 本校での活用について

本校では「歴史総合」の学習目標を次のように掲げている。

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を育成することを目指す。また、自国の動向とグローバルな動向を横断的、相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力や、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度を養う。

この目標から分かるように、本校では課題を追究したり解決したりする活動を重視し、現代の課題を歴史的に考察する力を伸ばすことに主眼を置いている。そして、このような態度を養うには歴史的な知識を習得することが必要となる。

そこで本校では、「歴史総合」を3単位で設定している。

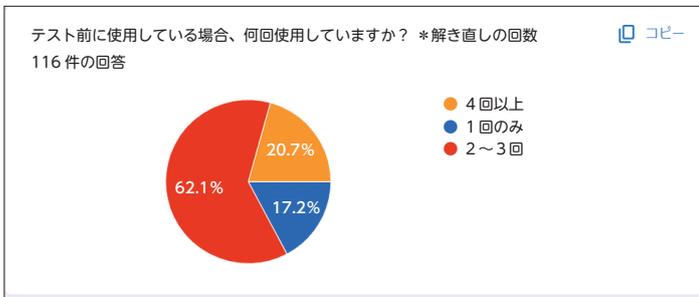


図1 生徒アンケートより テスト前に解き直した回数

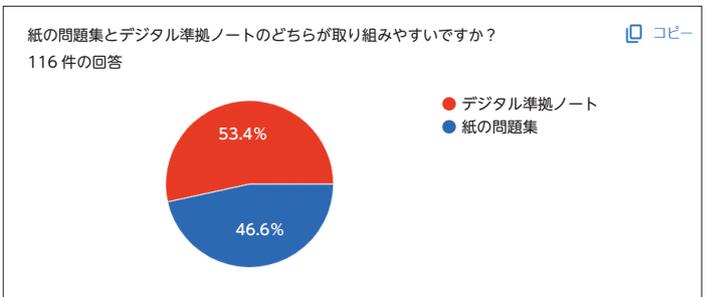


図2 生徒アンケートより 紙の問題集との比較

必修2単位のところを3単目で展開しているのので、比較的余裕を持って授業展開することができるはずだが、十分な知識を習得させながら、課題追究・解決のための活動や、教科書の単元ごとに設定されている思考力、判断力、表現力に対する「問い」や「単元テスト」、「小テスト」などの問題演習に取り組んでいくためには、さらに効率的な授業の進め方や課題の与え方を工夫する必要がある。そのためにも『デジタル準拠ノート』を効果的に使用したいと考えている。

現在『デジタル準拠ノート』は、日常の宿題、定期考査前や長期休暇中の課題として、多くの教員が活用している。それ以外の活用例としては、急な教員の欠勤に対応するために自習課題として使用したり、授業の復習のために使用したりしている。

生徒も定期考査前に試験範囲の内容を覚えたり、知識を整理したりするために『デジタル準拠ノート』に熱心に取り組んでいる。図1は「歴史総合」を履修している本校第1学年からその使用頻度についてのアンケートを取った結果である。図1は「テスト前に使用している場合、何回使用していますか。」というアンケートの結果で、6割以上の生徒が2～3回の解き直しを行い、4回以上解き直しに取り組んでいる生徒も2割を超えていることが見て取れる。このように多くの生徒が複数回にわたって解き直しに取り組んでいることが分かる。

次に、「紙の問題集とデジタル準拠ノートのどちらが取り組みやすいですか？」という質問には、半数以上の生徒が『デジタル準拠ノート』のほうが取り組みやすいと回答している(図2)。その理由を見てみると、「何度も問題に取り組めて覚えやすい」、「すぐに解き直しができ繰り返し覚えることができる」、「場所を選ばず取り組める」、「朝、電車での通学中でも問題が解けてよい」などがあり、場所を選ばず手軽に何度でも使用できるところに取り組みやすさを感じていることが分かった。

この「取り組みやすさ」については、「見て分からないことをそのままパソコンで調べられる」、「答え合わせしてくれる」、「パソコン1台でできるし、答えが自動で



図3 提出状況・解答結果



図4 ある生徒の学習行動履歴

すぐ分かるから便利」といった意見があった。これは『デジタル準拠ノート』に採点機能があることによって生徒の手間が省け、学習の効率化につながっていると考えられる。その結果、紙の問題集以上に意欲的な学習につながっているようである。

そして、『デジタル準拠ノート』の最大のメリットは管理画面の充実にあると考えられる。管理画面では「学習行動履歴」や「観点別レーダーチャート」で生徒の学習状況が確認できるだけでなく、「課題管理」や「作問ツール」などの便利な機能も備わっている。提出状況の確認画面(図3)からは生徒の解答回数を確認することができ、生徒の取り組み状況も可視化されて評価項目に取り入れることが可能となった。また、学習行動履歴からは生徒個人の取り組んだ日や時間帯などの詳細(図4)が可視化され、紙の問題集では把握することができなかった生徒の学習状況や取り組み方を確認し、学習に対する意欲や主体性などを客観的に把握することができるようになった。これらは観点別評価の「主体的に学習に取り組む態度」の評価項目として採用することができる

第3問

アメリカ独立革命・1772年、イギリス議会で(①)が成立。これに抗議する植民地の人々が(②)などを起こし、イギリスはこれを鎮圧しようとする。→12植民地は大連合軍を率いて反乱。→1775年、独立戦争が始まる。→1776年、ジェファソンらが起草した(③)が発表された。軍艦司令官となった(④)は、イギリスと争ったフランスなどの支援も得て独立戦争に勝利し、1783年のパリ条約で独立が承認された。→1787年、(⑤)が定められ、1789年、⑥が初代大統領に。⑥の特色：(1)自由・平等な市民が主権を持つ(⑦)を採用。(2)広範囲な自治権を持つ州から構成される連邦国家。(3)立法(議会)・司法(連邦裁判所)・行政(大統領)の(⑧)を採り、権力の集中を防ぐ。

問題	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	問題6	問題7
1	<input type="radio"/> A	<input type="radio"/> B	<input type="radio"/> C	<input type="radio"/> D	<input type="radio"/> E	<input type="radio"/> F	<input type="radio"/> G
2	<input checked="" type="radio"/> A	<input type="radio"/> B	<input type="radio"/> C	<input type="radio"/> D	<input type="radio"/> E	<input type="radio"/> F	<input type="radio"/> G
3	<input type="radio"/> A	<input type="radio"/> B	<input type="radio"/> C	<input type="radio"/> D	<input type="radio"/> E	<input type="radio"/> F	<input type="radio"/> G
4	<input checked="" type="radio"/> A	<input type="radio"/> B	<input type="radio"/> C	<input type="radio"/> D	<input type="radio"/> E	<input type="radio"/> F	<input type="radio"/> G
5	<input type="radio"/> A	<input checked="" type="radio"/> B	<input type="radio"/> C	<input type="radio"/> D	<input type="radio"/> E	<input type="radio"/> F	<input type="radio"/> G

図5 生徒の解答結果一覧

ため、今後生徒一人一人の学習態度を、客観的で公正な評価規準として取り入れられると考える。これらの管理画面の有用性は、『デジタル準拠ノート』を利用しての教員からアンケートを取った結果からも分かる。

- ・生徒の学習の定着度はもちろんのこと取り組み方も確認できる。
- ・生徒は紙ベースよりもタブレットの操作に慣れているので紙よりもよく取り組んでいると感じる。
- ・学習行動履歴から日常の学習の取り組み状況を知ることができ面談などの役に立つ。

例えば、図5のように生徒の解答結果を一覧で確認し、生徒の理解度をすぐに読み取ることができる。また正答率を見ることで生徒の学習定着度を確認することが可能になった。それにより、生徒の得意分野と苦手分野を把握することや、どの単元の内容の理解が不十分であったかを知ることができる。さらに、授業展開の参考になったり、考査前に復習授業で苦手分野の単元を重点的に実施したりすることに役立っている。また生徒の学習の進捗状況や定着度を見ることで個別の声かけの手助けにもなった。よってわれわれは『デジタル準拠ノート』を、問題を配信し生徒に課題として取り組ませるだけでなく、多様な目的で、日々の教育活動に有効的に活用している状況である。

3 授業での活用事例

筆者は2022年度の新課程初年度に「歴史総合」を担当した。新しい科目でどのように授業を展開していけばよいか不安のあるなかでスタートした記憶がある。「世界史A」のように古代から順を追って歴史を教えるわけではなく、近代からのスタートではあるものの週3時間の設定でも時間が足りず、なかなか授業内容は進まなかった。授業も歴史の流れと知識を教えることが中心となってしまう、「主体的・対話的で深い学び」を実践することなど不可能に近い状態であった。そういった反省を踏まえて、2024年度はICTを大いに活用し、生徒が主体的に授業に参加し、深い学びを実践できる授業を

1789年 国王ルイ16世
・特権身分への課税を検討
↓
三部会を召集...議決方法をめぐり対立
↓
球戯場の誓い
...第三身分の議員を中心に国民議会結成
・憲法制定へ

図6 授業スライド

進められるように改善を図っている。

まず、授業時間の確保のために、板書の時間を減らすことを考えた。板書内容を授業スライド(図6)にし、事前に「Google Classroom」にて生徒に配信することで生徒が板書を写す時間を省いた。

これは帝国書院の指導書 Web サポートの付属コンテンツの授業スライドを加工したもので、生徒には教科書を読みながら事前にノートに写しておくように指示をしている。授業時に板書を写す手間を省くことはもちろん、この作業が授業の予習にもなっている。この予習によって、生徒は授業中の教師の話を今まで以上に集中して聞くことができ、授業において深く学べる時間を生み出すことが可能となった。授業の進度も速くなり、生徒が思考力や表現力を働かせて作業する時間が確保された。また、今まで時間がなく扱うことができていなかったが、教科書の単元ごとに設定されている「確認」と「説明」に取り組みせることも可能となった。その際には『デジタル準拠ノート』の「作問ツール」を使用してこの「確認」と「説明」を論述問題として作成している。図7は教科書p.27～28の単元「アジア・アメリカに向かうヨーロッパ」の「説明」を使用した論述問題である。

この問題に単元の最後に取り組みせることによって授業の内容の理解をより深めることが可能となった。時間的余裕から個人で取り組みさせるだけでなく、ペアワークなどの協働学習の形で実施することも可能となり、より教育効果の高い内容で実施することができている。また、この論述問題には自己採点機能が付いており、生徒みずから模範解答を確認しながら採点することができる。解答例を確認することで、自分の解答と比べることができ、問いに対してより深く考えることにもつながっている。正答判断がつかない場合は、教員に質問することもでき、教員と生徒の双方向のやり取りが生まれ、内容理解がさらに深まっていると考える。オリジナル問題も管理画面において、図8のように生徒の解答を一覧として確認することができる。そのため、生徒の理解度を測ることができるだけでなく、思考力や表現力

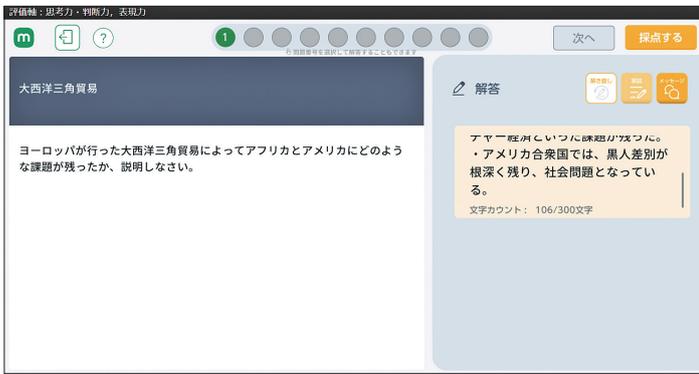


図7 「作問ツール」で作成した論述問題

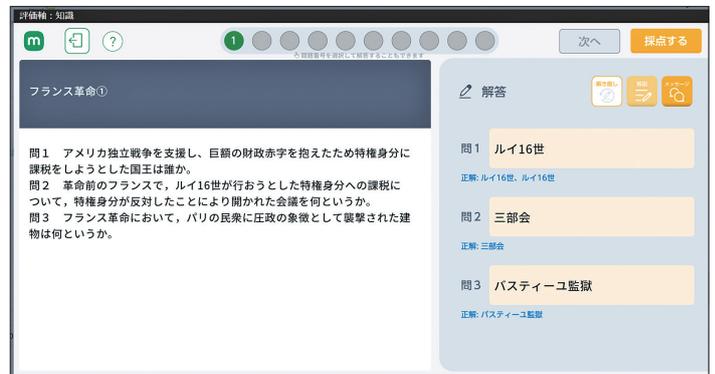


図9 単語問題



図8 論述問題の解答結果



図10 複数の単語問題からなる問題パッケージ

も見取ることができる。今後、採点基準を明確にすることで、思考力、判断力、表現力の観点別評価の評価項目として採用することも可能であると考えている。

「作問ツール」には、ほかにもさまざまな問題作成の機能がある。特に活用しているのは「単語」を確認する問題作成である。生徒の知識の定着を確認するために作った一問一答形式の問題を、復習を兼ねて授業の最初に取り組みさせている。問題数は、図9のように1回につき3～5題としている。問題数が少なく感じるかもしれないが、これはタブレットの起動に時間がかかったり、タイピングスピードに個人差があるなど、生徒間で時間差が生じるのを防ぐためである。これを授業開始の5分をめどに取り組みさせている。その後、これらの設問に対して補足説明しながら前時の復習を行い、知識の確認と定着を図っている。この単語問題をいくつか選び、問題パッケージにして配信することも可能で、小テスト（図10）として実施したりすることも可能である。このように授業の中でさまざまな用途で使用している。

このようにして従来のような教員からの一方向の授業展開を改め、生徒みずからが歴史的事象に対して考え、主体的に授業に取り組めるような学習環境を作っている。また予習、授業、復習の学習サイクルが構築できるように働きかけ、生徒の学習意欲の向上につながるような授業展開を意識している。

用事例である。まだまだ試行錯誤を繰り返しながらではあるが、ICTの活用による教育効果を感じ始めているところである。授業においては、歴史的事象について深く考える時間を確保することができ、生徒が主体的に授業に臨むようになった。歴史的考察力を伸ばすことで現代の課題について考えられる力を身につけさせることを意識して授業を展開している。そのために『デジタル準拠ノート』を今以上に活用したいと考えている。前回「歴史総合」を担当した時よりも、生徒の能動的な取り組みや生徒同士の対話を重視していることで、生徒がいきいきと授業に参加している様子がうかがえる。生徒が興味を持って授業に臨むことが生徒の歴史的思考力を高め、課題解決力につながると確信している。

一方、生徒の中には『デジタル準拠ノート』よりも紙の問題集のほうが使いやすく、学習内容も定着しやすいと感じている生徒もいるのが現状である。書いて覚えることに慣れている生徒は紙の問題集のほうが使いやすいと感じているようだ。また、授業でどの程度『デジタル準拠ノート』を活用するかは教員によっても異なる。しかし、筆者自身はICTを活用した教育は無限の可能性を秘めていると感じている。ICTを活用し、『デジタル準拠ノート』を使いこなし、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実践し、これからの時代を生き抜く力を歴史学習を通して育みたいと考えている。

4 まとめ

以上が「歴史総合」での『デジタル準拠ノート』の活

『デジタル準拠ノート』について
詳しくはこちら▶